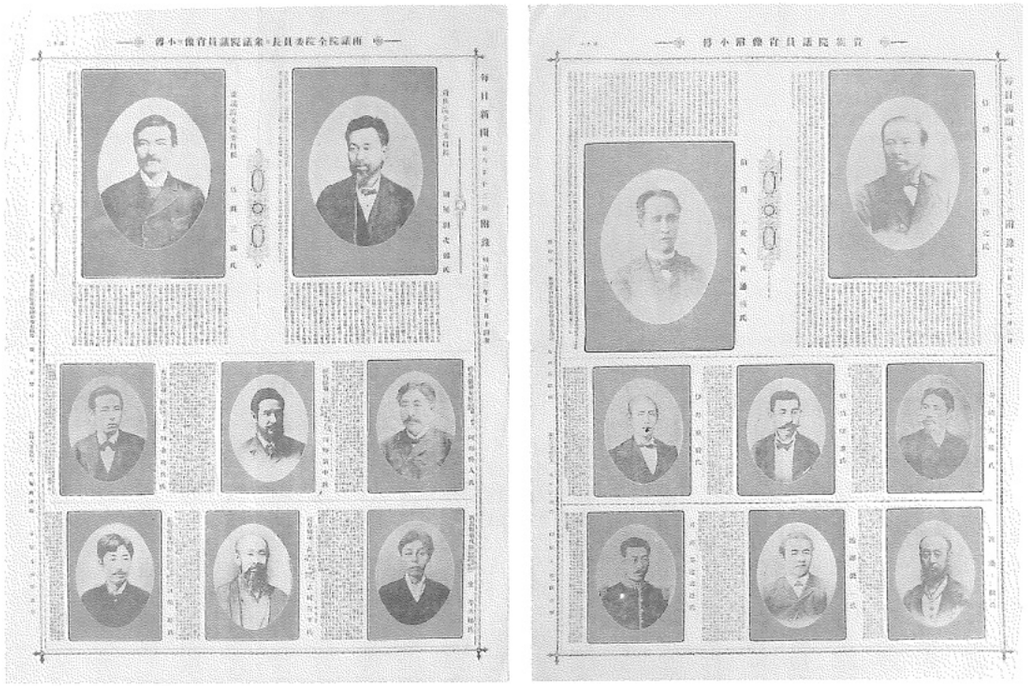


12 『貴族院議員及び両議院委員長衆議院議員肖像附小伝』明治23年　写真亜鉛版・木口木版・鋳造活字

弾劾権なきときは、内閣大臣横恣専擅に流れ、政治のために腐敗す」等々、開会以前から現今の国会同様で、名ばかりの大臣の存在する国会の有り様を、既に百三十年前に予言している。

国会が実際に開会されたのは、明治二十三年（一八九〇）六月十日の第一回貴族院多額納税議員選挙、七月一日第一回衆議院総選挙、十日貴族院華族互選を経た後の、十一月二十九日であった。時あたかも貴族院・衆議院議員の選出者が決まり、『毎日新聞』が新聞附録として各院別に全議員三百名の肖像写真に小伝を附し、七月十日から翌年にかけ、ほぼ十日に一回づつ順次刊行する。整版は猶興社で、秀英舎が新聞紙大（四六四截判）の洋紙に印刷している〔図12〕。

この新聞附録は、写真版を見慣れた今日では、ありふれた写真図版と見落とされがちである。しかし、国会開設と共に印刷史上でも記念碑的な写真網目亜鉛版による印刷物が、大量に印刷発行された嚆矢であることは記憶されるべきことである。以前から見知っていたものの、新聞紙ゆえに状態の良いものにお目にかかる機会に恵まれなかった。それが『国会』をもらって間なく、二十枚程まとまって古書展に安価で出ていたので、入手した次第である。因みに貴族院議員委員長の細川潤次郎〔左図右上〕は幕末長崎で石版印刷に触れ、正院印書局長として印書局に石版を取り入れた人物である。楕円形の写真版の周縁の罫線で飾られた枠は、木口木版と思われる。

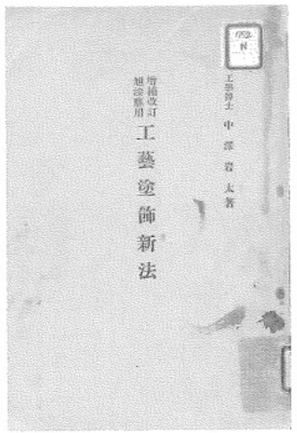
これ以後、緻密な木口木版と写真亜鉛版が併存する時代が暫く続くこととなる。人々が絵空事ではなく、よりリアルな表現・情報を求める時代が到来していた。

様々なる補遺——中澤岩太・太田誠二、板坂辰治・長谷川八十、森嘉紀

森　仁史

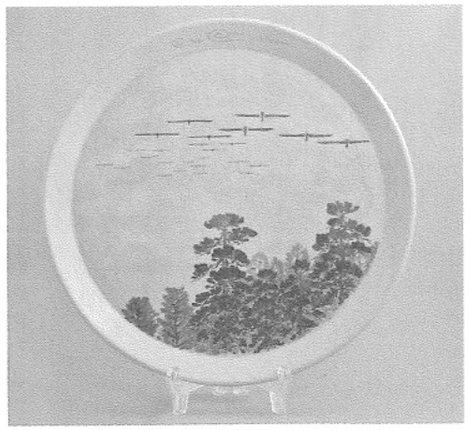
中澤岩太、太田誠二

前号で中澤岩太の提唱した旭漆を紹介したのだが、これについて中澤は『工芸塗飾新法』（昭和十年）と題した詳細な解説書を自費出版していることをその後知った。これによれば、旭漆とは中国、台湾に産出する桐油を原料として大日本塗料が大正十五年（一九二六）に開発したもので、桐油の精製方法を大正末に雨宮良孝が改良し、特許を取ったとのことである。これを知った中澤が蒔絵師と協力して塗法を開発、改良したということである。その後さらに改良に努め、二年後に大幅に加筆して改訂版〔図1〕を発行している。わが山鬼文庫は最晩年八十二歳の中澤の手になる旭漆作品〔図2〕を所蔵している。いかにも国家の進運をひたすら祈念していた人物らしく時節を直截に反映した作品である。



1　中澤岩太『工芸塗飾新法』1935年

金沢美術工芸大学附属図書館にこの再版本が収蔵されているのを知ったのだが、これは太田誠二（一八九九—一九七四）の寄贈したものであった。太田は富山県立工芸学校を卒業して東京美術学校（一九一四年漆工科卒）に進み、大正九年（一九一八）石川県工業試験場助手となり、翌年から石川県立工業学校教諭を兼任し、昭和十年（一九三五）校長となったが、十四年には静岡工業試験場長に転任した。この間、大正十五年（一九二六）日本漆工会からアメリカ独立百五十周年万博（フィラデルフィア）に派遣されている。



2　中澤岩太《飛行機之図掛額》1939年

太田は職に就いてから次のように農展に出品していたが、昭和三年（一九二八）から帝展にも出品入選している。一人の作家として優れた技量を持っていたが、「漆は塗料の王なり等と各所に盛に広告せらるゝ様になつた。…塗料の王なりと大声を発するものが、なぜ手箱や印籠のみを造つて居るのだろうか。…大いに現代に沿ふ様応用せなくては滅し行く産業の一つとも数へらるゝに到るだろう。」（『漆と工芸』第三七一号、昭和七年三月）という信念の持ち主でもあった。伝統技法を現代社会のなかで生きる路を模索しようとする立場では中澤と同じ見解であり、この書に共鳴するところがあったのかもしれない。

戦後は葉昭和二十一年（一九四六）金沢美術工芸専門学校設置と同時

年	農展	帝展
一九二一	雪ノ下模様漆器小重ほか二点	
一九二六	台付重（宝相鳳凰及模様）ほか五点	
一九二七	藤模様書棚ほか二点	虫のつどひ（蒔絵丸盆）
一九二八		卍字二枚折屏風
一九三一		静物小屏風
一九三四		

に講師となり、翌年専任講師、昭和四十年（一九六五）まで在任した。

板坂辰治、長谷川八十

昨二〇一七年春に企画した「1955・産業美術・発進」展で北國新聞社社屋に設置された高村豊周《八咫烏》を取り上げた。このときは作品の所在は確かめることができず、その図版のみを紹介した。高村は戦後金沢に在住していた美校卒業生浅田二郎（昭和十年図案科卒）、長谷川八十吉（同年工芸科鋳造部卒、作家としては長谷川八十の名で活動）と浅からぬ因縁があったが、彼らが中心となって石川県文化美術協会、金沢美術工芸専門学校が設立され、高村も関わることになった。美術文化協会長だった嵯峨保二は北國新聞社長であり、昭和二十九年（一九五四）社屋を新築したとき、玄関に置くモニュメント制作を高村に依頼し、板坂辰治が鋳造を受け持ち、《八咫烏》が完成した。しかし、『長谷川八十』（丹羽俊夫、一九八〇年）に「北国新聞社　シンボル」と題された図版（図3）が掲載されているので、長谷川もこの制作に関わったものとすべきだが、完成作とは翼の形状や下部がかなり異なっている。長谷川の原案を高村が修正したのであろうか。同書には嵯峨が創設した北陸放送のシンボル（一九五八）も長谷川作品として掲載されているので、この種のモニュメント制作を継続的に行っていたようである。長谷川は金沢美術工芸専門学校創立とともに、彫刻専攻教官となった。平成三年（一九九一）北國新聞社は移転し、旧社屋は取り壊され、この作品の所在がつかめなかったのだが、この像が現在は金沢美術工芸大学に保有され、ながらく倉庫に保管（図4）されていることを教えられた。作品は幅一三四・五×高さ一六〇・八cmと思ったよりも大きく、埃をかぶっているほかは良好な状態であることを知って安堵した。

3　北国新聞社　シンボル（『長谷川八十』より）

4　高村豊周《八咫烏》1954年

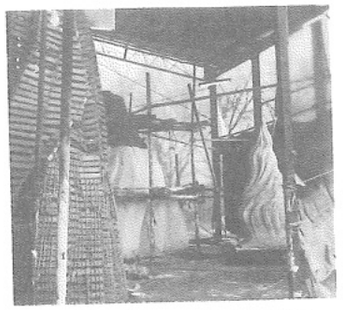
板坂は昭和十三年（一九三八）美校工芸科彫金部を卒業後、造幣局製造部彫刻課に二十年まで勤務したが、同年石川県美術文化協会嘱託に転じた。二十三年（一九四八）から金沢美術工芸専門学校講師、二十五年助教授となり、四十年（一九六五）に金沢美術工芸大学教授となった。一九六四年、『商工金沢』第一五巻第一二号に「金沢美大で平和の

5　『商工石川』15巻12号より

火」と題された次のような記事を見いだした。

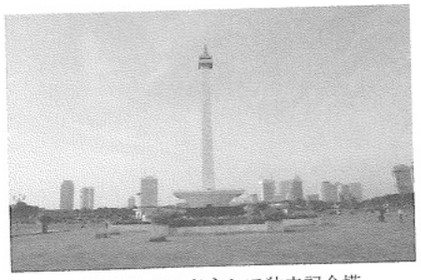
インドネシアで建設中の独立記念塔の先端にのせる〝平和の火〟が金沢美大で原型制作され、日イ親善の話題となっている。インドネシアは毎年八月十七日を独立記念日として盛大な祝賀行事をしているが、来年はジャカルタ市に高さ百三十メートルの独立記念塔を作ることになったので同塔のシンボルとなる〝平和の火〟（高さ十四メートル、下部直径六メートル）を高岡市の北陸銅器製作所に注文してきたもので、その原型を金沢美大の長谷川、板坂両教授が制作したもの。年末までには完成し、北陸銅器へ送る。

この記事に独立記念塔建設委員スタルソンらが原型を視察した写真〔図5〕が掲載されているが、ここに写っているのが縮小マケットのようである。前記『長谷川八十』ではこの記念モニュメント制作を板坂との共同制作として紹介し、別な写真が注釈なしで四枚掲載され〔図6、7〕ている。これを見ると原型は当時の美大校舎わきの野外で制作されたようである。



6・7　制作風景（台上は長谷川か）・鋳造風景か

現在モナスと呼ばれている独立記念塔〔図8〕はスカルノ大統領の提唱で計画され、一九六一年に定礎式が行われ、六三年にオベリスク部が完成した。同年のスカルノ失脚後建設が停滞したが、七五年に完成、一般公開され、今日に至っている。モナス頂部の炎はほぼ『商工石川』に報じられているサイズであり、形状もこの通りであるように見える。日本とアジアの文化交流にとってはきわめて大きな足跡ではないだろうか。



8　現在のインドネシア独立記念塔

板坂は戦後昭和二十一年から日展に金工作品を出品し、抽象的な造形を追求した作家であったので、この制作は彼にとって異色の作品だったに違いない。また、長谷川は戦前は二科会に出品していたが、戦後は二紀会に加わり、ジャコメティ風な制作を続けた。

森嘉紀

森が主宰した北国版画協会（一九五四年創設、この時点では北国版画会）の機関誌を本誌第七十四号で紹介したが、この会の結成以前の森の活動について知ることができた。

森旧蔵資料のなかで、もっとも古い版画作品発表は『石川警察』三七号（一九四八年五月）の表紙〔図9〕を飾った杜若の木版画

9 『石川警察』37号表紙 1948年

である。戦前の国家体制を警護した警察は民主化の波をもっとも厳しく蒙らなくてはならず、同誌には文学エッセイや警察の将来の議論が掲載されている。表紙はこのとき石川県工芸指導所所長であった高橋勇作と記されているが、版画には「嘉」の書判が入っているので、森の作品としていいと思う。また、同誌の表紙裏にはランボーの詩が掲載され、まだ金沢美術工芸専門学校に在学中だった鴨居玲（一九五〇年洋画専攻卒）が描いた挿絵〔図10〕が添えられている。高橋は石川県美術文化協会のメンバーだったから、森はその紹介でこうした作品掲載の機会を得ていたものと推測できよう。同じ年の『北陸農革時報』第一九号〔図11〕にも森の作品があり、ここでは表紙の絵だけではなく、題字、特集の文字も版面で作成したようで、版画技法によるグラフィックデザインの制作に意欲的だったことが伝わってくる。

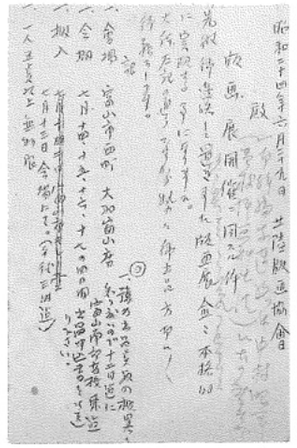
10 同 表紙裏 挿絵鴨井玲

11 『北陸農革時報』第19号 表紙 1948年

北国版画協会よりも先に、昭和二十四年（一九四九）富山に北陸版画協会が創設され、その第一回展が大和富山店で七月十四―十七日に開催された〔図12〕。この会は富山県立富山南部高校（現富山高校）に在職していた東一雄が中心となっていたが、この創設準備に森も一時は関わっていたようで、東と文通している。また、森はこの頃日本版画協会と連絡を取り合っている。

また、時期は分からないが、新日本版画協会金沢支部の設立を準備していたようで、その会則案が森の手元に残っていた。北国版画会第一回展目録に記された「日本版画は古来より日本特有の芸術でありながら…」の前文は同協会の趣意書の前文ときわめて近似している。

昭和九年（一九三四）武井武雄を中心として年賀状を版画で刷り、会員同士が送りあう榛の会が結成された。同会には棟方志功、恩地孝四郎、駒井哲郎、関野純一郎らが参加し、賀状を集めたアルバムも作成されたようで、二〇一七年にイルフ童画館で企画展が開催されている。同会は二十回、昭和二十九年（一九五四）まで武井が主宰し、それ以後を関野準一郎が引き継いだが、二十二回で終息した。森はこの会の活動を知っていたらしく、その解散を惜しんでいたようだ。森は北陸郵

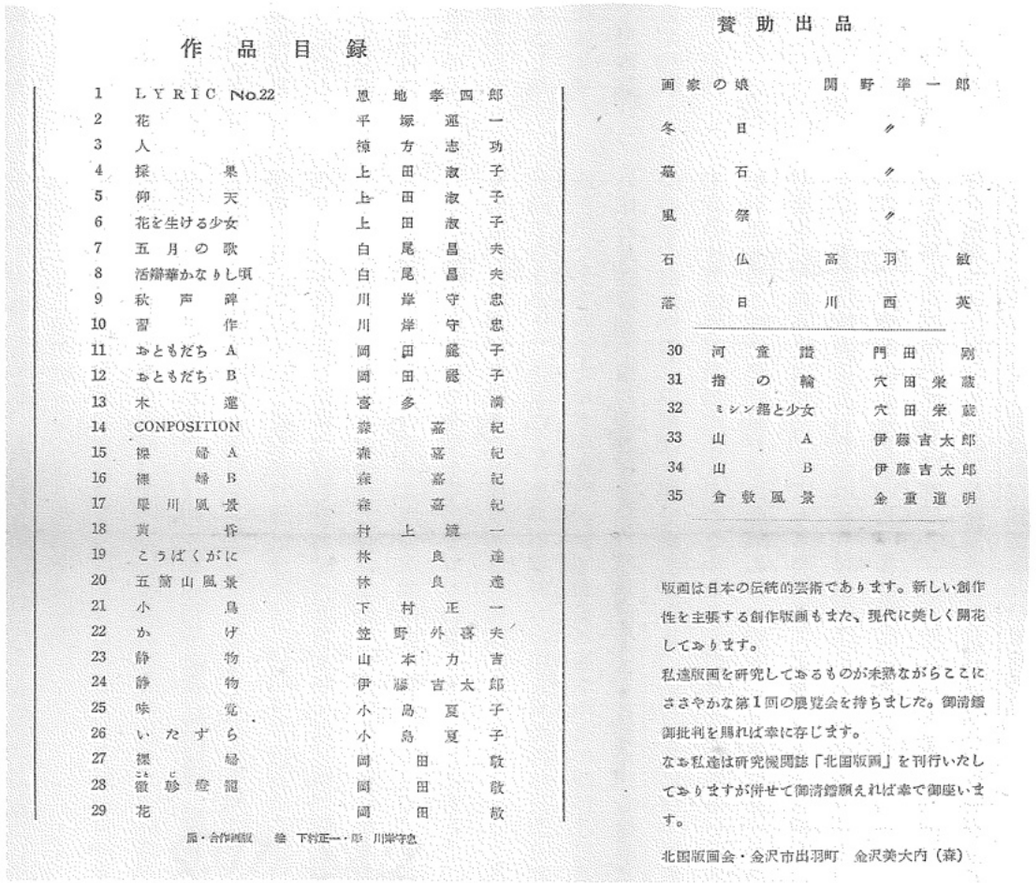


12 北陸版画協会展開催通知 1949年

政局の年賀状コンテストの審査をしていたからか、北国版画協会会員による賀状集を一九五五年から作成しているが、これはこの榛の会の先例に倣ったのかもしれない。

昭和三十四年（一九五九）十月森は関野を金沢に招いた際に、榛の会再興を提案したらしく、関野はこれに極めて積極的に賛成し、北国新聞向けの原稿「版画年賀状交換会第二十三回榛の会発足と勧誘」を森に送ったくらいであった。関野は再興のために武井、川上、山口源に顧問になってもらうようにと具体的な準備作業を書き送っている。また、森はアルバム製本を引き受けてくれそうな山本喜平にも打診している。森の起草したと思しき「「榛の会」再興のお願い」という長文の呼びかけ文も残っている。しかし、顧問を依頼しようと考えた三名から十一月初旬に返事が届いたのだが、なべて消極的であった。山口は「もしも利用に一片の値あると御考えなら、よろしいように」と葉書で返事を送ってきたが、武井は「大変結構な企画」であるが、「義務的なエネルギーは…全部を豆本の製作にそゝいでいくというのがいまの小生の心境」なので、「会員からは御除外頂き度く」という返事であった。また、川上は「御来示の趣甚だ失礼乍御断わり申し上げます」とこれまた葉書の返事であった。こうして、榛の会再興は森の熱意にもかかわらず、その初発において挫けざるを得なかったようである。

北国書林画廊で開かれた北国版画会第一会展の展覧会目



作品目録

1	LYRIC No.22	恩地孝四郎
2	花	平塚運志
3	人	棟方志功
4	採果	上田淑子
5	仰天	上田淑子
6	花を生ける少女	上田淑子
7	五月の歌	尾田昌夫
8	活潑華かなりし頃	尾崎昌忠
9	秋声碑	岸田守忠
10	習作	岸田守子
11	おともだち A	田中麓子
12	おともだち B	田中麗子
13	木蓮	宮多清
14	CONPOSITION	森嘉一
15	裸婦 A	森嘉一
16	裸婦 B	森嘉一
17	犀川風景	森嘉一
18	黄昏	村上鏡紀
19	こうばくがに	林紀一
20	五箇山風景	林良一
21	小鳥	下村正一
22	かげ	笠野外喜夫
23	静物	山本力吉
24	静物	伊藤吉太郎
25	咲く	小島夏子
26	いたずら	小島夏子
27	裸婦	岡田敬
28	微笑症	岡田敬
29	花	岡田敬

版・合作刷版 絵 下村正一・彫 川崎守忠

賛助出品

	画家の娘	関野準一郎
	冬日	〃
	蕗石	〃
	風祭	〃
	石仏	高羽敏
	落日	川西英
30	河童讃	門田剛
31	指の輪	穴田栄蔵
32	ミシン踏と少女	穴田栄蔵
33	山 A	伊藤吉太郎
34	山 B	伊藤吉太郎
35	倉敷風景	金重道明

版画は日本の伝統的芸術であります。新しい創作性を主張する創作版画もまた、現代に美しく開花しております。

私達版画を研究しておるものが未熟ながらここにささやかな第1回の展覧会を持ちました。御清鑑御批判を賜れば幸に存じます。

なお私達は研究機関誌「北国版画」を刊行いたしておりますが併せて御清鑑願えれば幸で御座います。

北国版画会・金沢市出羽町 金沢美大内（森）

14 第一回北国版画会展作品目録・賛助作品

古書を見る、古書を読む　二〇一八年九～十月

山田　俊幸

○月×日

其角堂平野さんと会場で待ち合わせ。其角堂さんは、つい最近湯島に越してきた。それで、会館で会いましょうということになったのだ。会場には、あきつに、大場白水郎の俳句集が出ていて、中の句がよさげだったのでそれを手にもって会場を廻ることにする。

●画家の物語／村井弦斎『小猫』と千社札風広告

同じあきつに、合本のような「小祢古」と題された村井弦斎の本が四百円であった。ハード・カヴァーである。汚本ゆえの値付けだ。これは村井弦斎『小猫』（春陽堂、明治三十年一月二十三日発行）の合本。漁師の子の出世物語。少年はやがて画家になる。この時代には、画家が立身の一便法で、出世のひとつになったことがこれで分かる。子猫は場面のあちこちに顔を出している。このハード・カヴァーは、わたくし製本だと思ったのだが、どうやら春陽堂による上下巻合本製本のようだ。本来は軟表紙だったものを、合本ではヒラに革を使い、背に布クロスで、上製本に仕立てている。この時代、革装本は珍しい。背の上下は草むら模様の欄画（図案）、タイトルに「小説小祢古（猫の図）村井弦斎」。これがプライベート製本でできるわけはない。口絵はどうやら外されたようだ。この本、値が廉いのも魅力だったが、巻末の春陽堂の広告に驚く。片面八ページにわたり、タテ四点、ヨコ五点、計二十点の既刊書の図版を並べている。これはみごとなものだ。其角堂さんが見て、「なんか千社札の小札のようだね」と言う。其角堂さんは、千社札のコレクターでもある。春陽堂は尾崎紅葉の薫陶を受けているので、そんな趣味があるのかもしれない。

●鏑木清方の岡鬼太郎『春の雪』

さらに巡ると、かわほり堂さんに、岡鬼太郎『春の雪』（双雅房、昭和十三年四月二十日第一刷発行）があり、それが鏑木清方装。三千八百円と予算を大きく上回る。だが、出会うこともない本。大場白水郎を戻して、この岡鬼太郎をもとめることにした。岡鬼太郎は岡鹿之助の父親。演劇評論家で江戸の粋（すい）を知る人だ。函の貼り題箋は「ラヂオ・ドラマ集　春の雪　岡鬼太郎」と愛想もないが、本体表紙はみごと。薄く緑ネズミ色の地に、タイトルの「春の雪」を銀箔押し。それに白を散らしている。本を開いて置くと、緑ネズミ色が曇天。白が雪である。曇天の雪の景だ。清方装多しといえど、これは、橋本多佳子の『おゆき』と並ぶ逸品。カットも清方。楽しい本。さすがは、かわほり堂さん。集書がみごとだとうなってしまった。

○月×日

前回、扶桑書房さんに取り置いてもらった雑誌がある。いずれも創刊号で、まあまあの状態。

●山六郎表紙『苦楽』（プラトン社）

山六郎表紙の『苦楽』（プラトン社）。おなじプラトン社でも『女性』は見ることが多いが、『苦楽』は少ない。震災後、家庭小説パターンで

13　第一回北国版画会展　1955年

革新派のあいだで試みられた集団制作の影響を伺わせる。こうしたところに新しい運動としての版画制作を金沢の地に生み出そうとしていた森の熱意を感じとることができる。展示作品のラインナップは森の意気込みを伝えて余りあるように思われるし、これまで知られていないようなので併せて紹介しておきたい。〔図14〕会員作品は全部で三十五点であり、このなかに恩地、平塚、棟方の作品が並んでいることが注目される。出品者のうち、下村と山本は金沢美術工芸大学の教員である。また、別枠となっている賛助出品は関野三点、高羽敏、川西英各一点であった。森の一九五〇年代の版画への取り組みは在京の作家を動かす程に熱情にあふれたものであり、この時代の地方都市における文化のありようを見事に反映しているように思われる。

はない、文学的にも上質な民衆小説（読み物）雑誌を出すということでの創刊らしい。『苦楽』の本拠地は大阪。これを購入に踏み切ったのは、現在、大阪産経で月一で書かせてもらっている《京阪神のデザイン力》での使用のため。『苦楽』が一冊もないので困っていたところだった。『苦楽』という名は、戦後、大仏次郎の肝入りで始まった雑誌の名と同じである。大仏次郎がプラトン社に了解してもらい、雑誌名を受け継いだということだ。きっかけは、その昔、大仏がプラトン社の直木三十五から執筆の依頼を受け、その名に愛着があったらしい。

●斎藤松洲表紙の『卯杖』

創刊号の再版だが『卯杖』（初版は明治三十六年一月）も取り置いてもらった。雑誌再版は珍しいが、尾崎紅葉などもかかわっていて、よく売れたのだろう。「卯杖」は、鬼除けの杖という。表紙絵は斎藤松洲で、多少、琳派の風神雷神あたりを意識したかで、よく出来ている。カットにも松洲の細かい心くばりが見受けられる。

●『批評』／淀野隆三の梶井基次郎書簡紹介

会場にはあいかわらず廉価で『明星』などが出ていたが、今回はパス。しばらくイマジュリィ系ばかりの仕事で、近代文学の研究はお留守だった。ちょっと気持ちをもどそうと、会場を見回ると『批評』というクォータリーがある。『批評』で有名なのは、吉田健一らの雑誌。どうやらそれとは違うらしい。ぱらぱらと見て行くと、淀野隆三が梶井基次郎の手紙を紹介している。全集には収められたものだろうが、梶井基次郎の文献は相当に目にしているのだがこの雑誌は知らなかった。まだまだ知らないことがあるものだ。